

From Woman to Women

今号の話題

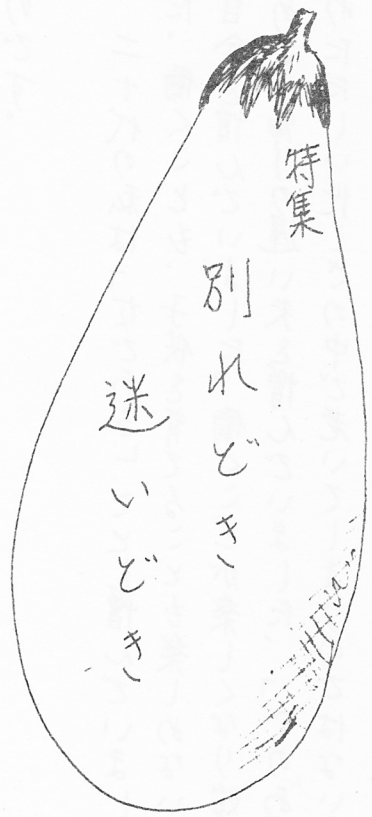
- 特集…… 別れどき 迷いどき
 - Kさんへ
 - 別れも楽し ショパールライフ
 - 身から出たサビシサ?
- お知らせ
- ユーシーブレイク

1993.11.2

特集

別れどき、

迷いどき、



Kさんへ

S・N

もう、二十年あまり夫のNと暮らしていること
になります。どの夫婦も似たような混乱を抱え込
みながら、自分たちの生活を積み上げていくので
しょうか。

「Nの前では自分を装わないようにしよう。共
同生活に入る時に、私はこのことを自分に対する
「かせ」にしました。自分を装ったために自分を
見失うという失敗があったからです。

若い頃の心と体は脆弱で、自分の目で見るにも
布切れでも覆ってあげたい程の羞恥心に襲われ
ます。夫とはいえ他者であるNの前でむきだしの
女で居ることは、本当に「かせ」でしかありませ

ん。私の心の混乱はたいへんなものでした。

この混乱がNへ向かう怒りや苦言になって爆発し、
反抗期の子供のように自分を持て余してしまっ
た。Nは「どうして、自分にだけ辛くあたるの
か」と言い続けていました。

Nにとっては迷惑な話です。とはいえ、私の存
在の全てをぶっつけてくれたNへのラブコールで
あったと思っています。

そして、「装えない自分」に慣れてくると、混
乱していることも、抱え込めるようになり、結果
としては、自分とNを知るためには、ずいぶん早
道であったようにです。

Nと出会う前に、一人の男、ふとの出逢いがあ
ります。時代は六十年の終わりから七十年にかけ
て——世界中が戦後処理と経済成長の波の中にた
くさんの不条理を生み出している頃のことです、
——私たちの若く、しなやかな感性は一枚のベトナ
ム戦争の写真にさえ、呑みこまれそうでした。

その不条理に心を痛め涙を流し、立ちつくす事
しかできなかつた私は、世界へ向けてのスタンス

を持った、強く穏やかな内面のぶを敬愛していました。彼の注目をあびること、からっぽな「個」の部分が充足できると思っていました。

ぶには志があり、私には歩き出す道がないという理由で、ぶとは別々の空間で生きていくことになりました。ぶの空間へ割り込みとうと何度かこころみましたが、その度にはじき飛ばされてしまいました。「個」として歩きだせない私の存在を抱え込むことに、とても躊躇していたのです。

ぶが結婚した時に、私は自分の気持が落ちついてくれるように望みました。夫との生活は波風があっても愛すべきものであつたし、夫とのケンカの度にぶへと心に向けて自分を捨て余してもいたのです。

二十代の私は「女である」ことを憎んでいました。働くことも、子供を育てることも楽しめない自分を憎んでいました。働くことが楽しくなり始めて、帰りの遅い夫を憎んでいました。「このあつただしい忙しさの中で老いてしまうのではない

かしら」と恐怖心に支配されて「私たち、もうおしまいだわ」と何度もNを脅迫していました。

こうした己をかるやかにしたい思いで通った私たちの集まりの場においても、私たちの自由な生き方が、自分には手の届かないものに思えて、かえって翻弄されて疲れて帰ったものです。

今でも、十分に忙しい。けど、成長した子供たちに信頼をよせて、夫にも自分にも甘えられる自分の自由さに居心地がよい。年を重ねることも楽しんでみず。

どうやら、エネルギーがいちばんある二十代だったからこそ「自分を装うまい」という無理ができて、かえって自分を縛っていたのでしょう。

自分を装いたい時はそうするのがよかったのに……。

Kさん。あなたから「ぶとはその後どうなの」と聞かれた時に「付きあい始めたばかりという気分だナァ」と思っていました。Nもぶも愛すべき男であると、すっかり納得して、心のスペースを広げてからもう、七年もたとうとしているのに。

ふとの友情は二十年以上のものです。私たちは夫や子供たち、それ以外の友だちと過ごす時間を、二人で過ごす時間と同じように大切にしようと思っ
ています。だから誰れかれを少し除いてまじ、二人の空間を作ろうとも思いません。たまたま二人で過ごせる時間が作れた時は、この宇宙の中で二人の時間が重なった事に感謝して、思いつくままに話しくします。

今でも別の空間で日常の自分を生きる二人にとって、お互いの立場や利害の壁がないことごとこまでも自由です。私たちは癒しの空間を作っているのです。

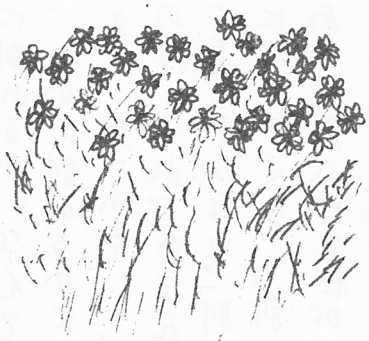
「女の会通信」での今回の企画を聞いた時、ふと別れることばかり考えていた昔を思い出しました。そして、そうしなくてよかったと思う現在を書いてみようと思ったのです。

Nへの罪悪感がない事で救われています。Nはふのことを私の良き友人だと思ってくれています。婚姻制度を盾にとり、男と女を語るNではありませんが、淋しい思いをさせてしまいそうなので、今のところはふのことは話すつもりはありません。

男も女も婚姻制度の中で女の位置・男の位置を生みだして、愛しあって暮らしたことを忘れてしまっています。人生の中で愛し合える人と出逢うことも、本来はたくさんあるはずです。大人の私が子供や社会に責任を持って生きる方法も何通りもあるはずです。

社会通念に振り回されたあげくに言うのですが、納得のいく生き方が、きつと、いい出逢いといい関係を生みだしてくれます。

ふと最近目指していることがあります。いつか3心から楽しめる自由なふEXがこぎえる関係になろうと……。



別れも楽し、シングルライフ

K・Y

サイモン&ガーファソンの作品に「恋人と別れる50の方法」というのがあるが、このタイトルにはおどろいた。七十年代だったと思うが、当時私は二十代、別れることを「方法」として表現するなど、まだ一度も男と別れた経験がなかった私にとってほととも信じがたかった。別れは別れであって、方法などというものが介在するものではないと信じていた。でも、周囲を見渡せば、たしかにそういうものはあったようだ。いわゆる遊び人の男たちは、いくつかの別れる方法をもっていた。女から恨まれずに、怒りを買わずに、うまく女と別れる方法を。できれば女の方から去って行ってもらうえばなお良しと。おまけに「彼はすてきな人だったわ」と言ってもらえば最高だ。

ということば、私に「別れる方法」が必要ではなかったというだけのことだったのだ。私の方から別れを言わない、言えないということごしかなかったというのだ。そういえば、二十代は別れを言えない自分に腹を立てたものだった。「別れ

るぞ！」と思わないと「いかに別れるか」なんて考えないもの。フラれた時は、いかに別れるかなんて必要じゃない。相手が考えて、相手をやってくれて、こちらは受け入れるのみ。それで右往左往させられるだけ。あとは立ち直るしかない。「別れから立ち直る方法」が必要になってくる。「別れる方法」とは、ずいぶん差がある。別れの主体がどちらかで全く違うのは当然といえば当然のことだ。

さて、そんな私にも、三十代になってやっと主体的に別れる場面が訪れた。待ちに待ったということばはなかったが、やはりどう別れるかを考えた。彼は妻子持ち、私は独身。もともと友人みたいな関係だったのが恋人になってしまった。ふたりがそのつもりなら、いつまでも恋人同士でいいさ、と三年ぐらい付き合っていた。三年といっても遠距離のため一、二ヶ月に一度ぐらいいか合っていたが、それはそれで楽しい会話とセックスがあった。私はこんな関係で年をとっていくのもいいなあ、と思ったものだ。ホーに、私にとってほととも楽な相手だった。たまにしか会わ

ないから私に気を使ってくれ。一緒に暮らして
いないから家事を強要されることもない。いわゆ
る女らしい心遣いより、仕事・生き方など考えつ
くありとあらゆる事に對して話をするのが楽し
い相手として期待される。お互いに思うことを存
分に話し合える相手であり、共感しない部分はあ
っても、相手がそつというふうに考える人だとい
う認識ですみ、お互いの違いは一緒に暮らしていな
いから利害の対立までには発展しないですむ。お
まけに「あなたもフツの男ね」と言われても仕
方がないという謙虚さももっている、ありのまま
の私で付き合える男ってそつザラにはいないとい
う希少価値のある人だった。そういふ相手とのセ
ックスは、私にとって新鮮だった。私にとって
セックスは恥ずかしいものであったのが、少しず
つ楽しいものへ変わっていった。のびやかという
所まではイマイチだったが、羞恥心はしだいに減
っていった。最初は私が誘ったのだが、その頃の
私は、セックスが私にとってどういう意味をもつ
のかを知りたいと思っていて、受身のセックスで
はないセックスとはどういうものかということに

興味津々だった。そして、そういうことも含めて
話ができる相手だった。会うことが楽しくみだつた
し、楽しく付き合っていた。何の不満もなかった。
それなのに、どうして私の方から別れる決意を
することにになったのか。別れる理由はいろいろあ
る。相手に對する興味・関心がなくなる、別に好
きな人ができる、相手を嫌いになる、こんなとき
はまあまあ簡単。別れたくなかったから別れるだけ
のこと。問題は別れたくないけど別れるとき。ど
うして別れたくないのか。付き合うことで得てい
たものすべてを失うことになる淋しさと不安、こゝ
れはとてむ大きい。楽しく付き合っていたのだけ
ら。ところが突然、楽しく会えなくなってしまう
た。それは彼の一身上のことと大きな節目になる
事件が起きたとき、二ヶ月ほど連絡がなかつたこ
とがきっかけだった。彼にとっては、今までの生
き方に対するプライド・男の活券にかかわること
が他人の批判にさらされるかもしれないとき、私
もその他人の中に入っていたのか、私に對しても
構えていたのかとわかつたからだ。私はそういう
つもりではなかつたが、彼にとってはそうだった。

それから、会うのにも気が重い。話しても楽しくない。相手とさめた目で見てしまう。つい観察しているのだ。言葉の裏をサツと考えてしまう。嫌いになりたり、別の新しい恋人ができたわけでもない。会ってこない時に別れることを考えると苦しくなるのに、会っている時は楽しくないのだ。私は別れる決心をした。楽しく会えないのなら付き合う意味などない。寝れるだけだ。

「セックスをするような関係はもうやめよう」と宣言した。相手は日頃「君が別れたいと言えば僕はいつでもそうする。深追いはしないから安心していいよ」と言っていた。あとは私の気持ちを整理できればそれで終わり。ところが、それが意外にたいへんだった。別れなければよかった、とは全く思わなかったが、たしかに別れたことは苦しかった。約三年の付き合いを整理する作業かとても苦しい。私はその苦しさから逃れたい一心で、他の男を誘った。「お願いだから私と寝て。優しくしてくれればそれでいいから」と。その人はとても優しくかった。

女友達ではどうしても充たされないうときがある。

そんな時、それなりの信頼関係があれば、特別の関係ではなくても、私の求めに対してその人なりに応えてくれる男はいた。それで充分だと思った。別れを宣言して一ヶ月後、切羽詰まった様子の別れた彼が家へ来た。夜遅くなり、何もしないからどうしても泊めて欲しいと言われ隣の部屋に寝かせたが、夜中に、これが最後だからとセックスを迫られた。最初は抵抗したが相手の必死な様子に「したければどうせ」という気になってしまった。私は、二度とこの人とセックスなんかしない。何も得るものはなかった。整理がついた。

あれから四年がたつが、あのやさしい男に出会ったおかげで、必要なときには必ず必要とする相手が現われるものだ、と極楽トンボを決めこんでいる。



身から出たサビシサ?

H・I

男と別れた時の事は、今あまり思い出さなくな
い気分だ。ピアノ曲を流して、風呂上がりのいい
気分の秋の夜なのに。というのも、ある男を思い
出したくないからだ。なぜそんなにも思い返して
みると、一言でいえば、もし万一子供ができても
とても産む気になれない相手とそうなつたという
自己嫌悪のせいだ。何事も一回目から成功するの
は難しいからしかたないのかもしれないが。

その当時、私は大きな困難を抱えていて耐えら
れない状態だった。そのことに多少理解を示して
くれた相手だった。男に一歩あぶれるのではと、
ひがんでいた私に、「好きだしと正面きつて言っ
てくれ、私は雷に打たれたようにガーンとした。
男が私を好きだと言ってくれた。今考えると別に
当たり前前と思うが「女」としての自分にんで自
信のなかった私は、世を憐んでいてその上、状況
にも追いつめられていた。鼻先にんじんにソク私
は食いついた。私の困難はすでに私の手に負えな
くなつていて、その格好の逃げ場だったかもしれ

ない。今だつたらとてもそうはならなかつたとい
う思いが私を不愉快にさせる。その男(彼という
表現さえもしたくない)はひとまわり年上で妻子
もちだった。当時の私の年令と相手の分別を思う
時、くだらぬ男だったとしか思えない。

思い出さたくない大きな理由は、初めての時、
終つたあと私にこう言った。「ササゲチョルンヤネ。
何のコツチャと思われらるだろう。私も一瞬何の
ことかわからなかつた。何という時代がかつた表
現。私にバージンではなかつたと思惑をもちらした
訳だ。その男は妻の時バージンだったの、でそれとク
違ふと言うのだ。私は意味がわかつた時、フンと
思つて背を向けた。私は言われける程の苦痛も印
もなかつた、そのかわり、なんか妙なもんだと思
つた。男は急にそそくさとなり、私を残して先に
一人帰つてしまつた。私はみじめだった。思い出
しても怒りでハキケがする。今私が若い娘にこん
なこと聞かされたら大声で「大バカモンガ!」と
どなるところだ。ひどすぎる。ひどすぎるとい
う感性を今私は持つている。しかし女(人間)とし
ての誇りも自信もなかつた当時の私には「好きし

と言ってくれた初めての男だった。男という言葉
さ之使いたくない。人にとつて何が一番悪いとい
つて自分をゴミヤカスのように思い誇りを持たな
いことだ。まあ相手だけが悪い訳ではない。こっ
ちが自分を無価値としか思えなければ相手はその
ようにしか扱わない。世の中とはそういうものだ。
私は自分の価値にめざめるのに多大な代価を払
たことになる。

その教訓からか、相手が好きになつてくれて、
ごはなく私が好きになつてから……というパター
ンにすっかり転換した。それでも、私は無価値の
呪いは小さくなくなったというだけで長く早く私の人
生に暮らした。このような子供の頃からのマイナ
スイメージがどんなに怖いものか親は知らないの
ではないだろうか。私の場合は母親が他の子と比
べて生まれすぎて「あらあ、こんなおかしな子
」と言つたと私に聞かせ、成長過程も地黒だ地黒だ
とことあるごとに言われた。きつと自分が色白だ
つたのが相当自慢だったのだと今は思う。そのよ
うな言葉を投げられても傷つかない強い心を持っ
ていたら、もつと違った人生があったらうといふ

と思う時もあったが、もしもなどは無意味である。
親とつきあい残した分をどこかの男でつきあい
直さなければならぬとしたら、やはりそれはい
へんなことだろう。若い女をスタートしたばか
りの人たちの苦闘を思わずにいらぬない。自らを
傷つけたりすることのありませぬように。そう願
つても、体のあちこちをぶついたり転んだりしな
いと本当にわかつたりけでキないという事もイヤ
という程わかるので、ただハラハラしているおば
さんというところか。

私の困難を支えてくれるはずが、都合が悪いと、
私には内緒で大切な決定をして私の前からいなく
なつた。私はますます落ちこみ、その困難から逃
げ出すしかなかつた。

おかげであれから二十余年、男との別れを幾つ
か経験し、全ては自分だという結論を得た。相手
がくしてくれない、くしてくれないという事
だけに目が行つてゐる間はなんにもどうにも進まな
い。男の人つていいもんなんだなあとしみじみ思える。
人として、誠実な相手とめぐり会つた時は、男全体
に対する不信感がだいぶやわらういた。

それでも、自分に甘い、男という甘さによりかかっている男たちの多いこと。いい男の少ないのが嘆きの種だ。いい女はけっこういるのに、いい男ってほんとに少ないねエというのはいさつ代りに使えそうなほど、ちよくちよく私たちの口の上る。あと何せ、代を過ごせばこの片思い状態から層として抜け出せるだろうか。

ページ数の関係で書けなかった幾つかの別れの時、たいていオイオイと丸一日を泣きとおし、別れを受け入れた。だいたい相手の男は例によって妻子ありになってしまい、お決まりコースをたどるはめになった。

天の丘

天の丘

ただ我ひとり

薬し

の心境になり独身の人をつきあうまでに十年以上の歳月を費した。自分に自信がないものだから、独身の若い男たちは手の届かない遠い存在だった。そして又その若さゆえに彼らに私の思いなどわからない、ひどく幼くも見え話が合うとも思えない

という気持ちもあり、年上、既婚者、苦勞人タイプ
の男ということになった。もう一つ両親の不仲が深刻だったせいも結婚がバラ色には思えなかった。しかし同じ兄弟でも年齢が違ったり性別が違ったりすると全く受けとめ方が違っているのにならで話をした時にわかかってビックリ仰天した。いったいこれは個人的資質の違いによるものなのだろうか。子供の時からまわりばかり気にして生きてきた気がする。

今、私は別れているよないい様な長距離ナン
トカの彼がいる。彼ほど私のことを知っている男
はいない。私は彼といると、和やかな気持ちになり
のんびりのびのびになる。ほんとに居心地がよい。
たくさんたくさん話をしたので、ツーカーで話が
通じ、これはわかからないだろうと思っていると、
しつかりわかってくれていて、得がたい相手であ
る。いずれ将来別れを経験せざるをえないのは、
痛手である。でも必要は発明の母、自分のできる
事は全てしたので、何とかなささと思っ
て。私にとつて怖いのは病氣と貧乏だけで、あ
とは何とかならあなと思っっているこのごろである。

穏やかな秋の陽射しがつづいています。いかがお過ごしですか。ペロ亭では、11月半ばから12月の年の瀬にかけ、福岡大分以外なんと8年ぶりの九州と初の奄美大島、以前には計画だけで終わった念願の沖縄でようやく、キャラバンを開催することになりました。

さて、13年目を迎えたこのキャラバンでは、岩国英子と米谷恵子の2人に加えて、4年前に東京からペロ亭入りした若手の新メンバー景平洋子の合せて3人が参加、それに途中からは、ペロ亭の末っ子の15歳のカラも助っ人として合流します。

そこで、ますます磨きがかかり、おもしろくなった英子のやきものを中心に、7年目の恵子の詩の朗読、それに、カゲこと景平の絵と、いっそう多彩に、女三人三様の表現が繰り広げられます。また、1990年春から夏の間2人と少年の中南米5ヶ国の旅の成果を、顔のついた植木鉢や赤っぽい彩色土器に、朗読やおしゃべりにぜひ感じとって下さい。一方、『ペロ亭通信6号』も、ペロ亭のこの4年の激動ぶりなど盛り沢山を満載し、より大きな出会いへとこの春、4年ぶりに再登場しています。

娘たち4人はあいついで自立、末の息子も…中学をパスし各地に旅しつづけた後のペロ亭での数ヶ月の後…来春の旅立ちを目前にしている今、「女2人と子供5人のペロ亭はすでに歴史的事実」。大きく変化した暮らしの中から、ペロ亭の女たちの表現への意思は、ますますあらたな領域へと、大きく深く手探りをつづける毎日…。さあ、そこでどんな出会いがあるか。まだ見ぬ南の海の向こうの、人々の生きている手ざわりとともに、すでにこの手の中のもの、また手放し、また捨て、始まるものがあるなら…。

持っています。数々の作品とともに、いつものように何気ないその時々。

1993年秋



11/20 (土) 佐世保
生活雑貨屋 パオ
0956-58-4563
11:00 ~ 4:30 即売
am pm
7:00 ~ 交流&朗読
pm

11/21 (日) 長崎
お茶屋 & 本
めし屋 ビックママ
0958-23-9553
11:30am ~ 5:30pm

ビック・ママで
11月21日(日)夜7:30~

ペロ亭の女たちとの夕食
も一緒にいかがですか?
参加費はとりあえず1,000YEN.
Beer・酒の入りかいで、あとは実費!!

20日(土)まで Mまで
乞う連絡!

23-9553 (ビックママ)



甘酒ってこんなに甘いものとは初め
て知った。江戸期夏バテ予防に冷や
っこい甘酒を飲んだとか、俳句の李
語でも夏になってるぞうだ。(J)
秋タケナワ。日曜日に熟女三人で
ピクニック。太陽の下にいれば身も
心も健康になるかんじ。声をかけ合
ってまた行こうね!
(Y)



珈琲ぶれいく

発行 者	長崎・女の会 「女の会通信」編集委員会	事務 局	長崎市滑石1丁目4-1-601 栗山 洋子 気付 TEL 0958-56-7595	印 刷	連 帯	No. 127
---------	------------------------	---------	---	--------	--------	------------